

ひょうご部落解放・人権研究所

編集・発行 /

一般社団法人 ひょうご部落解放・人権研究所

HB 通信

Hyogo Buraku Liberation and Human Rights Research Institute

〒 650-0003

神戸市中央区山本通 4-22-25 兵庫人権会館 2 階

TEL : 078-252-8280 FAX : 078-252-8281

e-mail : blrhyg@extra.ocn.ne.jp

URL : <http://www6.ocn.ne.jp/~blrhyg/>

● 所長の諏訪山だより

ねえやは十五で嫁に行き

「暴行又は脅迫を用いて13歳以上の女子を姦淫した者は、強姦の罪とし、3年以上の有期懲役に処する。13歳未満の女子を姦淫した者も、同様とする」。刑法177条、強姦罪の条文である。暴行・脅迫がない場合（相手方の同意があった場合）、強姦罪が成立しない年齢が13歳以上とされている。この13歳が日本の性交同意年齢で、欧米の16～18歳に比べて非常に低い。

大学の授業で、性交同意年齢の話をするとき、学生に「童謡の『赤とんぼ』で、ねえやはいくつで嫁に行ったのか」と尋ねると、学生は少し考えてから「15」と答える。そこで、「ねえやは何歳で結婚したのか」と私が言うと、学生は怪訝な顔をする。しかし、三木露風が「赤とんぼ」を作詞したときの年齢の数え方は、数え年であり、十五で嫁に行ったねえやは、満14歳か、13歳で結婚したのである。つまり、現行の刑法は明治にできたものであり、その当時は13歳で結婚する女性も珍しくはなかったのだ。その13歳という年齢が現在も変更されることなく、性交同意年齢として明示されているのである。

これはおかしなことだ。13歳という性交同意年齢は、日本の現状に合わないことは明らかである。なぜ、これを変更しようという議論が国会で起こらないのか。

日本の国会は、性に関する事柄を議論しようとはせず、先送りにし、放置している。生殖補助技術（俗にいう「不妊治療」）に関するルールづくりを提言した厚生科学審議会の生殖補助医療部会報告が出て10年以上になるのに、議論はまったく進んでいない。そのため、日本では何ら法的規制がないまま卵子提供や代理出産が行われている。出生前診断も同じで、法整備が進まないなかで、新しい技術がつぎつぎと開発され、不要なニーズを掘り起こしている。

どうして国会議員は性に関する事柄を議論しないのか。それは彼らが性について語る言葉をもたないからだ。下ネタ、猥談として性を語る言葉はもっていても、人間の生き方にかかわる問題としての性を語る言葉をもっていないのだ（それは、東京都議会や衆議院総務委員会での、女性を侮辱する野次からも明らかだ）。だから、真剣な議論ができないのである。情けない話だが、こうした議員を選んだ有権者の責任は大きい。

性について語る言葉をもち、性について考えを巡らせ、性について真剣に議論できる議員を育て、送り出すのは、私たち有権者の責任である。

所長 石元清英

まんがのすゝめ

『この世界の片隅に』 上・中・下巻

この史代／双葉社／2008年～2009年／定価：各648円(税別)

『この世界の片隅に』は、戦時中の呉と広島を舞台に描かれる家族の物語だ。主人公すずの幼いころをプロローグに、1943年から1946年までの日常が、日めくりを繰るように描かれている。

絵を描くことが好きなすずは、子どものころに1度だけ会った人に嫁ぐことになり、住み慣れた広島を離れ、呉で暮らし始める。着物をもんぺに仕立てたり、とぼしくなっていく食料を工夫しながら家族で食卓を囲んだり、戦場にいる兄に絵手紙を書いたり、小さな姪と手をつなぎ、軍艦を眺めたり——戦争の影響が色濃くなるにつれ変化していく日常が、作者のこの特有の、やさしく、少しとぼけたタッチで描かれる。可笑しいけれど、せつなく哀しい。今の私たちから見れば理不尽に強いられた生活を、人々は日常として受け止め、適応しながら暮らしていく。

8月が近づき、呉でも空襲が日毎に激しくなっていく。負傷して入院している義父を見舞った帰り道、不発弾によって幼い姪は犠牲となり、すずの右手も吹き飛ばされてしまう——やがて広島に原爆が投下され、玉音放送が流れ、すずは気づいて慟哭する。正義とはなんだったのか、この国の正体とはなんだったのかと。

あとがきで作者のこののは次のように書いている。「わたしは死んだ事がないので、死が最悪の不幸であるのかどうかわかりません。他者になった事もないから、すべての命の尊さだの素晴らしさだのもわからないままかも知れません。／そのせいか、時に「誰もかれも」の「死」の数で悲劇の重さを量らねばならぬ「戦災もの」を、どうもうまく理解出来ていない気がします。／そこで、この作品では、戦時の生活がだらだら続く様子を描く事にしました。そして、そこにだって幾つも転がっていた筈の「誰か」の「生」の悲しみやきらめきを知ろうとしました」。

太平洋戦争で犠牲となった人の数は、日本人だけで310万人。今更ながらその膨大な数に息をのむ。数字は大きければ大きいほど、現実味をおびなくなるが、310万人の犠牲者一人ひとりにそれぞれの生活があり、家族や人とのつながりが、確かにあった。

戦時中「とんとんとんからりん」と唄われた「隣組」という歌の曲が「ドリフの大爆笑」の主題曲につかわれたことや、代用食の「楠公飯」、闇市の相場やDDTの散布など、戦中戦後特有の生活文化を紹介した余白もおもしろい。

戦後69年を迎える8月に、ぜひお勧めしたい作品だ。

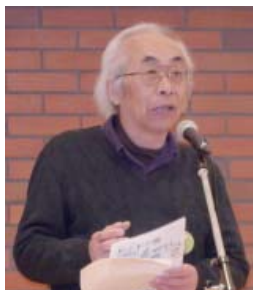
(K)

.....
2014年度『人権歴史マップ』連続セミナー第3回

「えんぴつの家—障害者と地域でともに生きる」

■日時:2014年9月6日(土) 14:00～15:30 ■場所:兵庫人権会館2階

■講師:松村敏明さん ■参加資料代:一般800円/会員・定期購読者・学生500円



社会福祉法人えんぴつの家(神戸市中央区)では、障害者が地域で生活するための拠点、自立のよりどころとして、様々な事業を展開しています。

理事長の松村敏明さんは、長らく教職にあつて、障害児教育や差別撤廃の運動に取り組まれました。また、1969年から「神戸心身障害者をもつ兄弟姉妹の会」運営に携わり、えんぴつの家では、20年以上にわたり障害者やその家族から相談を受けられています。第3回セミナーでは、松村さんをお呼びし、ご講演いただきます。

本の紹介

『死刑執行人サンソンー国王ルイ十六世の首を刎ねた男』

安達正勝著、集英社新書、2003年12月、定価700円(税別)

フランスには、1981年に死刑制度が廃止されるまで、世襲による死刑執行人がいたそうだ。そのなかでもパリの死刑執行人は、ムッシュ・ド・パリという称号を持ち、フランス全土の死刑執行人の棟梁であった。その棟梁の職を1687年から1847年までの160年、6代にわたり務めたのが、サンソン家である。今回紹介する『死刑執行人サンソン』は、4代目で、フランス革命期のムッシュ・ド・パリ、シャルル＝アンリ・サンソンの伝記である。

少なくとも18世紀末まで、フランスでは死刑執行人は差別される存在であった(19世紀以降の状況は、本書ではほとんど語られていないのでよく分からない)。各都市に死刑執行人がおり(後にパリだけになる)、比較的裕福であったという。しかし、侮蔑され、身体への接触も忌避された。商人は物を売るのを嫌がったので、法外な金を出さねばならなかった。子どもを近くの学校へ通わすこともできなかった。執行人一族の者が他の職業に就くことは難しく、商売を始めたとしても出自がばれると客はいなくなった。そのような厳しい差別があったため、各地の処刑人はネットワークで固く結ばれ、結婚も基本的にその範囲で行われたという。日本の部落差別などにも通じる点があるようだ。

また、本書には差別と闘った事例も紹介されている。貴族の女性客にナンパされて食事を共にしたシャルル＝アンリが、後に素性が知られて訴えられたときや、革命の際、死刑執行人には人権があるのかどうか議会で議論されたときには、シャルル＝アンリ自身が、法廷や議会に対して堂々と自分の権利を主張し差別と闘っており、なかなか興味深い。

ただ、差別の問題についてはあまり掘り下げられていない。それは、本書がシャルル＝アンリの生活の糧である死刑制度の在り方や、死刑執行人の苦悩に重点をおいているためであり、死刑制度を考える際には一読に値する本となっている。

著者は、フランス革命についての読み物をいくつか出している仏文学者で、文章は平易である。時代背景や文化、革命の経過は詳述せず、実証もほどほどで済ませているため、歴史物が苦手な読者にも分かりやすく、楽しく読むことができるだろう。

ちなみに、大人気漫画『ジョジョの奇妙な冒険』第7部の登場人物、ジャイロ・ツェペリはシャルル＝アンリがモデルだ。また、本書が原作でシャルル＝アンリを主人公にした漫画『イノサン』がある。(かま)



2014 人権教育ひょうごスタディツアー in 長田

○日時:2014年9月23日(火・祝) 13:00～

○集合場所:神戸市営地下鉄上沢駅改札 ○参加人数:40人(予定)

【行程表】

神戸市営地下鉄上沢駅⇒湊川隧道⇒湊川高校(定時制)にて講義⇒三六橋⇒金楽寺⇒丸山
中学校西野分校(夜間中学校)跡⇒長田区役所「人・街・ながた震災資料室」見学⇒解散

○お問合せ:人権教育ひょうご事務局

TEL:078-241-2345 / FAX:078-242-5569

部落解放研究第 35 回兵庫県集会

開催日 **2014年11月22日(土) 9:50～17:45**

会場 **ピフレホール 他** (JR新長田駅、神戸市営地下鉄新長田駅下車すぐ)

主催 **部落解放研究第35回兵庫県集会実行委員会**

参加費 **3,000円** (討議資料・報告書などを含む)



● **記念講演 (10:20～11:50)**

「共生する作法」／内田樹

(うちだたつる・神戸女学院大学名誉教授／凱風館館長)

● **映画上映 (16:00～17:45)**

ある精肉店のはなし

牛の飼育から屠畜解体まで、いのちが輝いている、
前代未聞の優しいドキュメンタリー…鎌田慧



● **分科会 (12:50～15:50)**

- ①地域課題の解決法は地域の中にある ②人権教育の現状と課題
- ③調査に見る差別の実態—調査結果をどう活かすのか
- ④社会的責任と人権 ⑤法律や条例を施策に活かす
- ⑥【フィールドワーク】靴の街ながたと在日コリアン (事前申込制)

◆共同開催

会場：ピフレホール

隣保館マルシェイベント『被差別部落に息づく食文化』

◇ **部落の食文化体験 (試食) 12:00～12:50**

油かす飯、油かす入りだんご汁をご試食いただけます。

◇ **部落の文化試論 12:50～** 講師：太田恭治 (アトリエ西濱主宰・花園大学非常勤講師)

◇ **展示：県内隣保館の講習事業から**



事務局から

- イスラエルによる殺戮が続くパレスチナ・ガザ地区では毎年3月11日、東日本大震災の犠牲者を悼む風揚げが催されている。そのイスラエルへの武器輸出の道を開く日本。殺すな！殺させるな！（H）
- 最近、夜中や明け方に飼い猫が騒ぐせいで眠いです。人間なら90歳を越すおばあちゃんなのに、元気いっぱい！「蟹工船」ではありませんが、こちらでは小刻みに殺されている心地です。（Ka）

- 7月に愛犬を亡くし、もう二度と生きものは飼わない！と固く心に誓ったのに、夫婦二人の気まずさに、第3者の必然性をひしひし感じる今日この頃。（K）
- 海水浴に行ってきたあー。でもパラソルの下にずっといたんだけど。花火大会・バーベキュー etc 行きたい所、やりたいことが沢山！まだ若いぞ？（I）
- 先日、愛猫にキャットタワーなるものを買ってあげました。さぞかし喜んで遊ぶだろうと思っていたのに、既にオブジェ化しています（+_+）（ひ）